

2018年11月26日

日本学術会議
国際リニアコライダー計画の見直し案に関する検討委員会
委員長 家 泰弘 様

三陸の海を放射能から守る岩手の会 一同 (岩手県)
放射能から子どもを守る岩手県南・宮城県北の会 世話人 (一関市)
ILC 誘致を考える会 共同代表 (一関市) 鍬ヶ崎の防潮堤を考える会 (宮古市)
岩手県有機農業研究会 (岩手県) 岩手放射能問題市民交流会 (岩手県)
平和と環境について学習するスイカの会 (滝沢市) クランボンの会 (盛岡市)
子どもに豊かな未来とふるさとを残す会 (宮古市)

国際リニアコライダー計画の見直し案に関する所見案に賛同いたします

貴委員会が11月14日公開された「標記国際リニアコライダー計画の見直し案に関する所見」に関し、広くこの国の将来、人々の幸せに立脚された納得のいく所見案を作成していただいたことに感謝と敬意を表する次第であります。

推進する側は県民や地域住民の疑問に真剣に向き合わず、計画がもたらす経済効果や学園都市効果など誇大な宣伝を行ってきました。しかし、貴委員会の所見案により私達岩手県民が抱いてきた不安、この巨大加速器計画の問題点やリスクが明らかにされました。莫大な経費の見積もりの具体性、研究者・技術者の確保、各種環境アセスメントと国際的環境問題の観点、正確な情報を地元伝えることと住民対話、ILC技術の広汎性、国家予算の配分、この高度情報化時代にデータを必要とする学者が果たして現地に在住するか、必要経費の国際分担、建設費に計上されていない経費などさまざまご指摘がありました。いずれも目が醒めるものがありました。

加速器内ビームダンプで発生するトリチウム 100 兆ベクレル（福島原発事故貯蔵汚染水の約 1/10）もの汚染水の生成やその処理最終処分については明確な説明が未だなされていないこと、なぜこのような大事なことが推進側からではなく、学術会議資料から初めてわかったのか、不都合な事実を隠蔽し進められてきたことになり、一気に不信の念にかられました。

振り返る時、この計画を見たのは 2011 年 8 月に 3・11 の大津波復興基本計画の参考資料に盛り込まれたのが最初でした。以降その経過やリスク情報は示されないまま災害復興の混乱期にあった県民や地元民の合意を得ずに強引に進められてきました。この巨大計画が当初から密室で、非民主的に進められてきたことが大きな誤りであったように思います。

真っ当なことを言いにくくなってきているこの国において、真の学者集団として日本学術会議の存在があり、この国の人々のために学者集団としての良心を発揮しこのような所見案を作成されたことは大きな救いでありました。所見提出直前と遅くなってしまいましたが、敬意と感謝を申し上げ岩手県民として御礼といたします。

連絡先 三陸の海を放射能から守る岩手の会 岩手県盛岡市山岸
電話 019-661-1002 mail:hgf01360@nifty.com 世話人永田文夫